

目次

おしやべり時計の秘密

5

訳者あとがき

254

主要登場人物

- ジヨニー・フレッチャー……………書籍セールスマン
サム・クラッグ……………ジヨニーの相棒
サイモン・クイゼンベリー……………クイゼンベリー時計社の創業者。時計コレクター
エリック・クイゼンベリー……………サイモンの息子
ボニータ・クイゼンベリー……………エリックの妻
トム・クイゼンベリー……………サイモンの孫
ダイアナ・ラスク……………トムの婚約者
エレン・ラスク……………ダイアナの母
ニコラス・ボス……………時計コレクター
ウイルバー・タマラック……………クイゼンベリー時計社の営業部長
ジヨニー・コーニツシュ……………クイゼンベリー家の土地管理人
ジム・パートリッジ……………私立探偵
ヴィヴィアン・ダルトン……………シヨীগール
モート・マリ……………出版社の社長
マディガン……………ニューヨーク市警の警部補
ピーボディ……………〔四十五丁目ホテル〕の支配人

おしゃべり時計の秘密

第一章

サイモン・クイゼンペリーは死にかけていた。齡七十を過ぎてまだ四年しか経っていないが、老いた心臓には過度な負担がかかり、二年前にはドクター・ワイカグルに余命わずか六か月と宣告された。しかし彼は、医師の見立てを裏切つて、さらに十八か月生き延びていた。

だが、十九か月は無理だろう。サイモン老人はそのことを知っていて、車椅子に座り、自分に残されている時間を時計が刻むのを聞いていた。そこには千の時計があり、それぞれ同じ物語を語っていた。一回カチリといえ一秒、六十回カチリといえ一分、千回カチリといえ千秒……いいや、千回カチリといつても、ほんの一秒だ。

サイモンは時計をにらみつけた。混乱させられる。いまましい代物だ。大金を注ぎ込んできたというのに、結局は裏切られた。それは彼の余生を刻んでいた——あまりにも速く。

そこには千の時計があつた。あらゆる形とサイズの時計だ。新しいものもあれば古いものもある。サイモンは世界各地からそれらを集め、歴史の中から発掘したものもあつた。十五世紀の教皇領の王子が所有していたものや、ロシア皇帝のとおつておきもある。大主教の愛人の持ち物もあつたし、十八世紀の海賊が絞首台に向かうときに身に着けていたものもあつた。

時計は時を刻んでいた。隅の振り子時計、ガラスケースの中の宝石を飾つた小さな時計、一日に二

十四回、一時間ごとに雄鶏が時を告げる、光沢ブロンズ仕上げの置時計。

あらゆる時計が時を刻んでいた。そのどれもが、サイモンに残された時間の短さを思い出させた。老人の青い目が時計を激しくにらみつけ、しわの寄った手が、車椅子の横にあるテーブルのベルを鳴らした。

使用人が静かに部屋に入ってきた。名前は思い出せない。ポニータが家を取り仕切るようになってから、使用人がやたらと増えていた。あまりにも出入りが激しいので、顔も覚えていられない。サイモンは目の前にいる使用人に向かって顔をしかめた。

「時計を止めろ」

使用人は部屋を見回した。「ええと……全部ですか？」

「当たり前だ、馬鹿者め！」サイモンは鋭くいった。「これ以上チクタクいうのを聞いていたくない。全部止めろ」

サイモンが命じたのはきわめて骨の折れる仕事だった。使用人が雇われたのは、時計を動かしておくためだった。ねじを巻く必要のあるものは巻き、錘式の時計には錘をつける。時計を動かしておくやり方は教わっていたが、止め方は教わっていなかった。

彼がおぼつかない手つきで三つ目の時計を止める前に、サイモン・クイゼンベリーは怒りで顔を紫にし、車椅子で部屋を出ていった。そして、別の使用人を呼んだ。

「工場に電話しろ」彼は指示した。「せがれに、ニコラス・ボス連れてここへ来るよう伝えるんだ。到着したら知らせしてくれ」

サイモン・クイゼンベリーは、いったい何事かと知りたがっている少数数のグループを見回し、目にしたものに満足した。

彼は息子のエリックにいった。「おまえが今のおまえのようになったのは、わしのせいかもしれない。だが、おまえに素質があれば、わしを身動きできなくしただろう——そして、わしはそれに満足しただろう」

エリックは四十九歳だった。がっしりした体格で、乗馬ズボンにブーツ、つば広のステットソン帽という格好でないときには、ツイードを着ていた。エリックはどこから見ても男らしかった。だが、見た目だけだった。彼は父親の皮肉に顔を赤らめ、妻のポニータを不安そうに見た。ポニータは、あからさまな軽蔑の目で夫を見ていた。

エリックはいった。「不公平です、お父さん。わたしをこの会社に入れておきながら、何の権限も与えてくれないのですから」

「当然だ」サイモンはびしゃりといった。「おまえがまっとうな大人になっていれば、権限を与えたとも。だがな、ひとつ驚かせてやろう、エリック。おまえに会社を継がせる。全部おまえのものだ。百万ドルの負債さえ払えればな」

エリック・クイゼンベリーは目をしばたいた。「百万……」

「百万ドル。それがクイゼンベリー時計社が銀行から借りた金だ。猶予は六か月ある。それまでに、百万ドルを払う当てがあると銀行を信用させることができれば、チャンスはある。銀行が信用しなければ——会社は連中のものになり、おまえは求人広告を読むことになるだろう。そのほうがいいのかもしれんが……。何かいいことはあるか、ポニータ？」

ポニータ・クイゼンベリーはエリックの二番目の妻だった。自称三十五歳だが、見た目は四十歳、実年齢は四十五歳だった。黄褐色の肌で、あばずれ女が好き人間には美人に見えるだろう。繊細さは電動ノコギリと同程度だ。彼女は義理の父親にいった。「時計のことを聞きたいんですけども。わたしがいつも時計に魅了されているのはご存じでしょう。わたしの思いは——」

サイモンはぶつぶついった。「ああ、おまえの思いはわかっている。頭がおかしくなりそう。老いばれのお金のためじゃなかったら、家じゅうの時計をぶち壊してやるのに、そんなところじゃないか、ポニータ？ 答えていいよ。時計はおまえのものにはならないのだから。そこにいるギリシア人の友達のものになるのだ。わけを教えてやれ、ニック」

ニコラス・ボスは背が高く、痩せていて、オリブ色の肌をしていた。彼はうなずいた。「なぜなら、時計の真価がわかるのはわたしだけからです。わたし自身、コレクターなのでね。それに——」彼は礼儀正しく咳払いした。「時計はすでにわたしの抵当に入っています。そうでしたね、わが友？」

「ああ」サイモン・クイゼンベリーは同意した。「わしが苦境に陥ったとき、ニックが五十万ドルをばんと出してくれたのだ。その見返りに、わしはひとつを除いて、家にあるすべての時計を担保にした。わしが死んだときには、彼は抵当権を行使することができる……」

「しかし、そのひとつというのが、ミスター・クイゼンベリー」ギリシア人がつぶやいた。「どれよりも価値のあるものです。そのためなら五万ドル出しましょう」

「それでは安いな、ニコラス。とはいえ、売る気はない。おしゃべり時計は孫のトム・クイゼンベリーに遺すつもりだった。しかし——」老人の声が喉に絡んだ。「やつは祖父に劣らぬ大泥棒の悪党に

なったようだ。すでに立派にそれを証明している——おしゃべり時計を盗んだことでな」

サイモンは周りに集まった人々を、鋭い目で順ぐりに見た。その目が息子のエリックに止まった。「そうとも、あいつは時計を盗んだ。だが、それだけの度胸があった。それに、親父にハドソン川へ飛び込めというだけの度胸があった。あの子は時計を持つにふさわしい。ただ、あれがどれだけ価値のあるものか、わかっていてほしいものだ。なぜなら、わしが遺すものの中で、あれが一番価値のあるものだからだ」彼は鼻腔を膨らませた。「まだ望みを持つているのか、エリック？ やめておけ。会社は六か月間はおまえのものだ。この屋敷もおまえのものになるが、六か月は持つていられないだろう。銀行がすぐにも圧力をかけてくるだろうからな。そうとも、ここも隅から隅まで抵当に入っているのだ。……何かいったかな、ポニータ？」

ポニータ・クイゼンベリーの顔からは色が失われ、頬紅だけが赤い浮島のように目立っていた。鼻腔は膨らみ、目はぎらぎらしている。彼女はいった。「いまますますそじじい！」

サイモンは笑った。甲高い、冷淡な笑いだった。「おまえがその台詞をいわなかったら、がっかりしていたところだよ、ポニータ」

第二章

屋敷を最初に出たのはポニータ・クイゼンベリーだった。彼女は広いベランダでしばし足を止め、不愉快そうに敷地を見た。四年前に初めて訪れたときから（時計屋敷）を好きになったためしがない。屋敷そのものは、ポニータの趣味にぴったりな贅沢さだったが、サイモン・クイゼンベリーは時計に取りつかれていた。屋敷全体を変わった時計で埋め尽くすだけでは飽き足らず、敷地にまで時計のモチーフを広げていたのだ。

屋敷は険しい丘の上に建てられ、それを中心に碎石舗装した道が、時計の文字盤のように正確な対称を描いて十二本延びていた。六時を指す道は、正門に通じる自動車用の私道になっている。

ポニータ・クイゼンベリーは百ヤードほどあるその私道を歩いた。門の脇には石造りの小屋があり、彼女が近づいていくと、浅黒くがっしりした男が出てきた。彼はポニータ越しに屋敷を見やり、いった。

「どうした、ポニータ？ ネズミを取り上げられたネコのような顔をしてるじゃないか」

ポニータは男に冷ややかな目を向け、小屋に入った。男もそれに続き、ドアを閉めた。

「うまいことやったんじゃないか？」彼は訊いた。「さつきエリックが入っていったぞ」

「知ってるし、どうだっていい」ポニータはいり返した。「何もかも、どうだっていいわ。もう潮時

ね。あのじいさん、最後に汚い手を使ってきたわ」

名目上は土地管理人のジョー・コーニツシュは、問いかけるようにポニータを見た。「やつはもう何日ももたないんだろう？ そうしたら、分け前が入るはずだ」

「それが汚い手だっているのよ。分け前なんか無い。たつた今いわれたわ。ここにあるもの全部が抵当に入っているのよ。執行官は、あいつがくたばるのを待っているだけ」ポニータは怒ったように顔を歪めた。「このまま出ていける？ あの意気地なしのエリックと結婚したのは、億万長者の父親が棺桶に片足突っ込んでいて、もう片方の足をバナナの皮の上に乗せていたからよ。そうしたらどう？ あのじいさん、自分のものは全部質入れして、くたばったときには十セントだって残らないわ。つまり、わたしは人生の盛りを四年も無駄にしたってわけよ」

ジョー・コーニツシュの濃い茶色の目がきらめいた。「まったく無駄ってわけじゃないだろう、ポニータ？」たくましい腕を彼女の腰に回し、引き寄せて真っ赤な唇にキスをする。しばらくして彼女を離し、ジョーは言った。「それに、何ドルかは手に入る」

「ジョー」ポニータはむっとして、浅黒い土地管理人を見た。「ときどきあなたを殺したくなるわ」彼は笑った。「だろうね」

ポニータは怒ってドアへ向かった。ドアを開けたとき、エリック・クイゼンベリーが私道を歩いてくるのが見えた。

相手もポニータを見ていたので、彼女はその場に立っていた。近づいてきた夫はいった。「お邪魔だったかな？」

「いいえ」彼女はいい返した。それから、門のほうへ向かう夫にいった。「彼女に知らせに行くのに

「ご一緒しましょうか？ それとも、あの天使のようなエレンのことを、わたしが知らないとも思っている？」

エリックは答えなかった。門まで来ると、振り向きもせずそれをくぐった。

彼はぎくしゃくとした足取りで丘を下り、ヒルクレストの村を抜けて、エレン・ラスクが暮らす質素なアパートメントを目指した。彼女は家において、いつもの穏やかな態度で迎えた。

「こんにちは、エリック」

エレン・ラスクは四十五歳だったが、肌は二十年前と同じくらいすべすべしていた。ポニー・クイゼンベリーのようにつつ張ったところはない。

エリックは素早く居間へ行き、エレン・ラスクに面と向かって、苦々しくいった。「もうおしまいだ。父は一セントも残さずにわたしを切り捨てようとしている。父のものはすべて抵当に入っている。会社さえもだ。少なくとも、それくらいは遺してくれると思っていたのに。だが、そうじゃなかった。六か月後には、わたしは浜辺に打ち上げられているだろう。やり直すには遅すぎる」

エレン・ラスクは額にしわを寄せた。彼女は静かにいった。「何とかなるわよ、エリック」

「どうやって？ わたしは一度もチャンスをもらえなかった。父はわたしを子供扱い——あるいは、能無し扱い——してきた。なのに今になって、会社を丸投げしてきた」彼は短く笑った。「まあ、とにかく、ひとつの問題は片づくだろう。ポニータのことだ」

エレンがすぐさまいった。「駄目よ、エリック、あなたは——」

「ああ、わたしは何もしないさ。でもあいつはやるだろう。金のために結婚したのに、結局無一文だとわかったんだからな。もう一日だって未練はないだろうな……。きみと結婚すればよかったよ、エ

レン」

エレン・ラスクは顔を上げた。少し悲しそうな笑いを浮かべる。「もう遅いわ、エリック」

「わかっている」彼はうめいた。「父とは二十五年前に決別しておくべきだった。そうしていたら、事態は変わっていただろう。だけど、エレン、本当に遅すぎるのか？」

「ええ」彼女はつぶやいた。「ダイアナがいるわ……それにトムも……」

息子のことをいわれ、エリックはたじろいだ。「父は誰よりもトムがお気に入りだ。なのにトムは……父が家宝のように大事にしていたおしゃべり時計を盗んでいった」

エレンははっと息をのんだ。「エリック、トムがやったかどうかはわからないでしょう——」

「いいや、わかる。トムが家出したときに、おしゃべり時計も消えたんだ。今も出てきていない。父は何もいわなかったが、今日、トムが時計を盗んだと認めたよ……たぶんトムは、本物の値打ちの何百分の一というはした金でそれを売り、ぱつと使ってしまったに違いない」

「トムから連絡はないの？」

エリックはかぶりを振った。「ハガキ一枚来ないよ。わたしは——いつでもあいつのことを考えている。ダイアナに連絡はなかったか？」

「ええ。あの子も心配してるわ。間違いない、あのふたりは——シッ！ ダイアナだわ」

その通りだった。掛け金の鍵を手に、アパートメントに入ってくる。背が高く、ほっそりした少女で、年は二十歳前後。三十代前半の、痩せた浅黒い肌の男が一緒だった。男はエリック・クイゼンペリーを見ると目を見開いたが、その驚きは満足げな表情に変わった。

「これはこれは、ミスター・クイゼンペリー。あちこち探していたんですよ。実は——」

〔著者〕

フランク・グルーバー

アメリカ、ミネソタ州生まれ。9歳で新聞の売り子として働く。貧しい青年が苦難の末、大富豪になるホレイショ・アルジャー・ジュニアの立身出世物語に夢中になり作家を志す。農業誌の編集を経て、〈ブラック・マスク〉などのパルプ雑誌を中心に作品を発表する。代表作に『フランス鍵の秘密』(40)、『笑うきつね』(40)、The Pulp Jungle (67) など。

〔訳者〕

白須清美 (しらす・きよみ)

早稲田大学第一文学部卒業。英米文学翻訳家。主な訳書にC・ディクソン『かくして殺人へ』、P・クエンティン『犬はまだ吠えている』、C・デイリー・キング『いい加減な遺骸』など。

おしゃべり時計の^{どけい}秘密^{ひみつ}

——論創海外ミステリ 233

2019年5月20日 初版第1刷印刷

2019年5月30日 初版第1刷発行

著者 フランク・グルーバー

訳者 白須清美

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1829-0

落丁・乱丁本はお取り替えいたします